

「猫」からの脱出——日露戦争と作家としての出発

柴田勝二

1 子規の死とスコットランドへの旅行

夏目漱石がその精神状態をなかばはみずから悪化させつつ二年余を過ごしたロンドンでの研究生活を切り上げ、日本に向かう船中の人となつたは、明治三五年（一九〇二）一二月五日のことであつた。漱石を乗せてアルバート埠頭から出航した日本郵船の博多丸は、香港を経て翌三六年（一九〇三）一月二〇日に長崎に至り、さらに二二日に最終目的地の神戸に入港し、翌二三日に漱石は故国に上陸している。

ロンドンでの最後の年となつた明治三五年は、後に『文学論』としてまとめられることになる研究に没頭し、膨大なノートが積み重ねられる一方、その研究の内容が当初文部省から命じられたものとはかけ離れたものとなつてしまうことによつて、自身を追い詰めていかざるをえない一年となつたが、その間に日本では漱石にとつて貴重な人物がその短い命を閉じていた。すなわち大学予備門時代からの旧友であり、俳句の世界に漱石を導いた正岡子規が、肺結核に起因する脊椎カリエスを悪化させ、激痛のなかで同年九月一九日に絶命していた。

子規が結核による最初の咯血を見たのは明治二二年

（二八八九）五月で、それ以降徐々に病状を悪化させていった。明治二八年（一八九五）五月に、日清戦争の従軍に赴いた清からの帰途の船中では大量の咯血をし、帰国後神戸の病院で二ヶ月間の静養をした後、当時松山で教鞭を執っていた漱石の下宿に身を寄せ、八月下旬から一〇月半ばまで二ヶ月弱の共同生活をしていることはよく知られている。子規はその後上京し、病に身体を蝕まれながら「病床六尺」の空間を自身の世界として、俳句の革新に力を注いでいったが、漱石はイギリスに留学する前に根岸の子規庵を訪れ、旧交を温めた¹。最後の訪問は明治三三年（一九〇〇）八月二六日に、寺田寅彦を伴つてのものであつたが、雑誌『ホトトギス』の同年九月三〇日号の「消息」欄に「大患に逢ひし後は、洋行の人を送る毎に、最早再会は出来まじくといつも心細く思ひ候ひしに、其人次第次第に帰り来り、再会の喜を得たる事も少からず候。併し、漱石氏洋行と聞くや否や、迎も今度はと独り悲しく相成申候」と記しているように、漱石との別れが永遠のものとなる予感をすでに抱いていた。

その予感のとおり、漱石の滞英中に子規の病状は悪化の度を強め、死の領域への接近が止まることはなかった。勤め先であ

る日本新聞社の『日本』に明治三四年（一九〇一）一月から七月にかけて連載された『墨汁一滴』では、以前は庭を歩行することが楽しみであったのが、三年前くらいからそれが叶わなくなり、一昨年からは坐ることすら困難になり、現在は「せめては一時間なりとも苦痛なく安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日のわが希望なり」という状況にあることが述べられている。苦痛のあまり自殺の誘惑に駆られるようになるもの、果たせなかつた際の苦痛を考えると実行にも及び難く、同年一月六日にはロンドンの漱石に宛てて「僕ハモ一ダメニナツテシマツタ。毎日訳モナク号泣シテ居ルヤウナ次第ダ」という心境を書簡に赤裸に綴っている。同じ書簡には「僕ハトモ君ニ再会スルコトハ出来ヌト思フ。万一出来タトシテモソノ時ハ話モ出来ナクナツテルデアロー」と、自分が確実に死に接近しつつある感触が記されている。翌三五年の春に漱石夫人の鏡子が見舞つた際には、子規は「お顔や唇はまるで半紙のやうに白く、息遣ひが荒くて、見てゐても苦しきやうでした」という様子で、鏡子は「あれでよくまあ生きてゐられるものだと思ひました」という感想を覚えている（『漱石の思ひ出』改造社、一九二八）。

その約半年後に子規は身まかるに至るが、漱石が子規の死を知つたのは、高浜虚子から一月下旬に受け取つた書簡によつてであった。その返信に漱石は「小生出発の当時より生きて面会致す事は到底叶ひ申まじくと存候。是は双方とも同じ様な心持にて別れ候事故今更驚きは不致、只々気の毒と申より外なく候。但しかゝる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候」（一九〇二・一一・一付）と、間断ない苦しみか

ら解放された子規の魂を慮る言葉を綴っている。帰国後明治三六年二月に漱石は田端の子規の墓に詣で、追悼の文章も起草していたが、未完に終わっている。そこでは人間の生が「泡」というはかないものに譬えられ、「愛ある泡なりき信ある泡なりき憎悪多き泡なりき」という比喩で、多彩で烈しい感情とともに短い生を終えた子規への思いが表現されていた。

子規がその死へと歩みを進めていつた時期は、漱石がロンドンで神経症的な症状を悪化させていつた時期でもあり、東京とロンドンで二人はともに苦闘をつづけていた。両者の違いは、子規の肉体の病が不治であり、死をいつ、どのように迎え入れるかが問題であつたのに対して、漱石の精神の病は治癒に向かいうるもので、漱石自身もそのための努力をしていたということである。子規がすでに幽冥界の人となつていた明治三五年一〇月初旬には、漱石は気分転換を兼ねてスコットランドへの旅行を試み、その美しい自然に癒されている。この旅行について漱石はロンドン在住の知人の英語学者である岡倉由三郎に宛てた書簡に「目下病気をかこつけに致し、過去の事杯^{なご}一切忘れ、気楽にのんきに致居候／小生は十一月七日の船にて帰国の筈故、宿の主人は二三週間とまれと親切に申し呉候へども、左様にも参り兼候」（一九〇二・一〇頃付）と記しているが、多胡吉郎『スコットランドの漱石』（文春新書、二〇〇四）によれば、漱石をスコットランド高地のピトロクリ²に迎えたジョン・ヘンリー・デイクソンは岡倉由三郎の兄である岡倉天心とも親しい知日家の実業家で、漱石の症状を知る由三郎の尽力でこの療養を兼ねた旅行が実現されたようである。岡倉由三郎は漱石がロンドンで〈発狂〉したという電報を文部省宛に打つたともさ

れる人物であるだけに、漱石の状態を憂慮する思いが強かったはずで、そうした経緯は十分考えられるだろう。

漱石がこの旅行とピトロクリの宏壮なデイクソン邸での滞在を居心地良く思ったことは、帰国の途に着いたのが書簡に記された「十一月七日」を一カ月近く過ぎる時期にまで遅延されていることからうかがわれる。当初数日の滞在でロンドンに戻るはずだったのが、書簡にある「二三週間とまれ」という「宿の主人」すなわちデイクソンの勧めどおりの滞在となった。日本の文化、とくに日本美術に詳しいデイクソンとの交わりは、前年の化学者池田菊苗との対話を想起させるような、知的な刺激に満ちたものとなったに違いない。それは東西文化の差違とそれを乗り越えた文化享受の普遍性という、池田との親交がきっかけとなって自身が取り組んできた研究の主題ともつながる内容をはらんでいたはずである。孤独と苦渋に満ちた漱石のイギリス留学であったが、精力を注いだ研究の起点と終点に、知的な昂揚感を与えてくれる相手との共生があったことは貴重な僥倖であった。

漱石は後年『永日小品』（一九〇九）でこの旅行について一節を設けて叙述している。「昔」と題された節は「ピトロクリの谷は秋の真下にある」という一文に始まり、現実世界から脱して「百年の昔むかし、二百年の昔にかへつて、安々と寂びて仕舞ふ」かのような谷の様相を詩的な文体で綴っている。デイクソンの人柄や知性を具体的に述べた箇所はないが、その風体については「主人の髯は十月の日に照らされて七分がた白くなりかけた。形装も尋常ではない。腰にキルトといふものを着けてゐる。俣くろまの膝掛あんどんばかまの様に粗い縞の織物である。それを行燈袴あんどんばかまに、

膝頭迄裁つて、た豎たに襷を置いたから、かぶらはぎ膝脛かぶらはぎは太い毛糸の靴足袋で隠すばかりである」と、スコットランド高地人の伝統的な衣裳をまとった姿が描かれている。

『永日小品』は現在と過去を行き来しつつ、懐旧的な内容の節においては、漱石の記憶に揺曳する人びとが点描される作品である。イギリス留学中に会った現地の人としては、このデイクソンの他に二番目の下宿のミルデ家の人びとと、英文学の個人教授を受けたクレイグが姿を現し、クレイグについては終盤に連続する三つの節が割かれるという比重が与えられている。興味深いのはデイクソンとアイルランド出身のクレイグがともにイングランドの間ではないことで、ミルデ家の人びとにしても、主婦はフランス系の女性で、その継父に当たる人はドイツ人であった。いずれもイギリス社会においては周縁性を帯びた人びとで、時を置いて漱石の追憶のなかに浮び上がったのは彼らが異邦人として疎外感を与えられがちであった漱石の感覚に馴染みやすい存在であったためでもあるだろう。

一方つねに親しみにくさを感じさせられていたイギリス人との交わりで、ロンドンでの最後の挿話を提供することになったのが、五番目の下宿先の主婦であるミス・リールの姉妹である。ミス・リールは漱石が滞在した下宿の主婦としてはもつとも教養の高い女性で、漱石にも一目置き、また下宿人としてその精神状態にも気を遣っていた。漱石がスコットランドへの旅行に赴く前に、気分転換のために自転車に乗ることを勧めたのも彼女であった。

漱石は明治三五年の九月から一〇月にかけて、当時ロンドンで流行していたサイクリングに取り組み、その顛末が帰国後

の明治三六年（一九〇三）六月に『ホトトギス』に発表された「自転車日記」に綴られている。ドイツで生まれた自転車がいギリスで人気化するようになったのは一八八〇年代であり、とくに一八八八年にジョン・ボイド・ダンロップがそれまでの硬いゴムタイヤに代わって乗り心地のよい空気タイヤを開発したこと、一八九〇年代には男女を問わない流行が起こった。自転車の人気はイギリスにとどまらずヨーロッパ各地に及び、王室の人びとや政治家など、知名人もその流行に加わっていた³。漱石もその社会現象的なサイクリング人気の末端を担うことになったわけだが、それは決してみずから選んだ嗜好ではなく、ミス・リールの「自転車に御乗んなさい」というありがたい難い命によつて、「自転車に乗るべく否自転車より落るべく」サドルにまたがることになったのだった。

漱石は学生時代に弓やボートを好み、また器械体操に巧みであつたという証言もあるように、必ずしも運動神経が鈍かつたわけではないが、この未知の二輪の乗り物には難渋を強いられた。当時同宿していた、小宮豊隆の叔父にあたる犬塚武夫の指導を受けて練習に取りかかった⁴ものの、「吾事休矣あゝわがこゝろきゆうすいくらしがみ付ても車は半回転もしない吾事休矣と頻りに感投詞を繰り返して暗に助勢を嘆願する」という有様であつた。何とか車を前に進めることができるようになって、速度や方向をうまく調節することができないために、人や物に繰り返し衝突して落下し、立木にぶつかつて生爪を剥がすこともあつたようである。「其苦戦云ふ許りなし、而して遂に物にならざりき」という結末に終わった。身体を動かすことは下宿に「籠城」しがちであつた漱石には悪いことではなかつたが、サイクリングを楽

しんで神経症から解放されるということにはならず、逆にこの難行を課せられることによつてミス・リールへの「猜疑心」が強まり、「余が継子根性は日にく増長」するだけという「無残」な結果を得ただけであつた。

2 起点としての「自転車日記」

見逃せないのは、小宮豊隆が指摘するようにこの「自転車日記」が、処女作の『吾輩は猫である』（一九〇五—〇六）の出現の前段階をなしていることである。小宮はこの作品の「自身身を諧謔化するとともに世界を諧謔化する態度」と、同時期の随想「倫敦消息」の自在な文体が合わさるところに『猫』の叙述がもたらされているという視点を示している（『漱石の芸術』岩波書店、一九四二）。

これはきわめて妥当な把握であり、とくに「自転車日記」を書きえた時点で漱石を「作家」たらしめる意識と方法はその分水嶺に達していたといえるだろう。三番目の下宿であるブレット家での日常を正岡子規に宛てた書簡の体裁で綴つた「倫敦消息」には、確かに長身のイギリス人が行き交う街路で「妙な顔色をした一寸法師が来たなと思ふと是即ち乃公だいこう自身の影が姿見に写つたのである」といった、自己を「諧謔化」する叙述が見られ、またブレット家の人びととともに夜逃げ同然の引越越しを強いられることになる顛末の語りも小説的な興趣をほらんでいるが、『吾輩は猫である』の文体により強く近似し、漱石作品の特質への強い連続性をもつのは「自転車日記」の方で

ある。たとえば鉄道馬車と荷車の間をすり抜けようとした際に別の自転車に割り込まれた場面は、次のように綴られている。

余が車の前輪が馬車馬の前足と並んだ時、即ち余の身体が鉄道馬車と荷車との間に這入りかけた時に、一台の自転車が疾風の如く向から割り込んで来た、斯様な咄嗟の際には命が大事だから退却に仕様か落車に仕様か杯の分別は、さすがの吾輩にも出なかつたと見えて、おやと思つたら身体はもう落ちて居つた、落方が少々まづかつたので、落る時左の手でした、か馬の太腹を叩いて、からくも四這よつんばいの不体裁を免がれた、やれうれしやと思ふ間もなく鉄道馬車は前進し始める、馬は驚ろいて吾輩の自転車を蹴飛ばす、相手の自転車は何喰はぬ顔ですうと抜けて行く、間の抜き加減は尋常一様にあらず、此時派手やかなるギグに乗つて後ろから馳け来りたる一個の紳士、策むちを揚げ様さまに余が方を顧みて曰く大丈夫だ安心し給へ、殺しやしないのだからと、余心中ひそかに驚いて云ふ、して見ると時には自転車で乗せて殺して仕舞のがあるのかしらん英国は剣呑な所だと

(傍点引用者)

この作品での叙述の一人称の基調が「余」であるにもかかわらず、ここでは「吾輩」という一人称が二度顔を見せ、しかもこのもつたいぶつた響きをもつ代名詞が用いられるのは、自分が「落車」したり、自転車を馬に蹴飛ばされたりするという、晴れがましくもない場面においてなのである。これはまさに「猫」という卑小な存在が「吾輩」という尊大な一人称を用いるちぐはぐさが、そのユーモアや諧謔の起点をなしている『吾輩は猫

である』と同じ着想であり、処女作につながる語りの方法を漱石がこの時点ではぼ身につけていたことが分かる。

叙述の内容においても、このくだりは、たとえば『猫』の「五」章で「吾輩」が鼠を捕ろうとして台所で奮戦する場面を想起させる。日露戦争の日本海海戦での勝利を知った「吾輩」は、自分もそれに負けまいと鼠を捕ろうとするものの、相手は思うように獲物となつてくれず、簡単にあしらわれてしまう。柵の上の相手を目がけて飛びかかった際も、尻尾に別の鼠が取りついているためにかろうじて柵に爪がかかっただけで、「吾輩は愈危ふい。柵板を爪で搔きむしる音ががり／＼と聞える。これではならぬと左の前足を抜き易へる拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩のからだだがぎり／＼と廻わる。この時まで身動きもせずに覗ひをつけてみた柵の上の怪物は、こゝぞと吾輩の額を目懸けて柵の上から石を投ぐるが如く飛び下りる。吾輩の爪は一縷のかゝりを失ふ。三つの塊りが一つとなつて月の光を豎に切つて下へ落ちる」という結果に終わってしまう。

どちらの叙述においても、身体を用いた行動が落下を伴う形で不如意に陥ること、初めの企図とはかけ離れた結果に終わるとともに、「吾輩」という一人称の大仰さがその不体裁を糊塗しつつ際立たせるといふ共通性が見られる。カントは『判断力批判』で笑いの生成を〈期待の無化〉に求めている⁵が、ここでは「吾輩」という一人称代名詞がはらむもつたいぶつた尊大さが「期待」の地平として作用することで、主体の現実行動の貧相さによつてその地平が過剰に無化されるゆえの滑稽さがもたらされているといえよう。そして小宮豊隆が指摘するように、この滑稽さをかます「諧謔化」ないし相対化の対象は、

自己と同時に相手にも向けられていて、そこに漱石のとくに初期作品における表現の戦略が見られる。すなわち「自転車日記」では自転車を乗りこなせない自身の不体裁をみずから笑うとともに、こうした行動を自分に強いてくるイギリス人が、『吾輩は猫である』では鼠に見立てられたロシア兵が相対化されて現れることになるのである。

それはいうまでもなく寓意（アレゴリー）の戦略にほかならない。漱石文学を貫流する特質はリアリズムと寓意の融合にあるといつてよく、その比重によつて作品の質が決定されることになる。総じて初期作品は寓意の側面が強く、中期以降の作品はリアリズムの比重が高まるといえるが、二つの側面はつねに共存しつつ漱石の作品世界を形成しつつづけていく⁶。引用した「自転車日記」と『吾輩は猫である』の場面に共通するのは、ともに主人公ないし語り手と彼らが関わる相手との関わりが、日本と西洋の関係性の寓意をなしていることで、それは『猫』においてはより明瞭である。ここでははつきりと日本海海戦の戯画として「吾輩」と鼠の〈闘い〉が位置づけられており、ここにこの作品における日露戦争への取り込みと相対化という、漱石の両義的な姿勢が現れていた⁷。

そこから遡及すれば、『猫』のわずか一年半前に発表された「自転車日記」が同様の着想をはらんでいても不思議ではない。引用した箇所も自転車をめぐる「余」の悪戦苦闘は「英国は剣呑な所だ」という概括で閉じられており、作者の「英国」に対する否定的な感慨を託すことがこの作品の動機に含まれていることが察せられる。そもそもイギリス滞在の終期における経験を文章化するのであれば、スコットランドへの旅の方が材料

も多いと考えられる。『永日小品』の一節をなす以前に、一篇の美しい紀行作品を生み出すことは漱石には容易だったはずである。それをおこなわず、あえて晴れがましくもない自転車の苦闘を作品の素材としたのは、それが漱石の創作意識により強く叶っていたからである。二年余にわたるイギリスとの関わりを凝縮する性格を帯びていたのは、スコットランドへの心地よい旅ではなく、傷と痛みを伴う自転車との格闘の方であった。

この素材を漱石が選んだのは、それが同時代の日本とイギリスの関係性の寓意ないし比喩となりうるからであった。この出来事を漱石が経験した明治三五年（二九〇二）が、日英同盟が結ばれた年であったことを看過することはできない。日英同盟は中国と朝鮮の独立の保全を表向きの主眼としつつ、現実にはイギリスにとつては中国での権益をロシアに奪われないうために、日本にとつては日清戦争後の「三国干渉」のような西洋の強国による侵害を蒙らないために結ばれたものであり、日露戦争時にはイギリスは情報活動面などでの協力をおこない、日本の勝利に寄与している。反面この同盟のきっかけとなった明治三三年（一九〇〇）の義和団事変では、ボーア戦争に兵力を取られていたイギリスに代わって日本が北京に出兵して、中国でのロシアの勢力拡張に歯止めをかける役目を果たしていた。イギリスにしてみれば、日本は義和団事変以降、アジアでの〈憲兵〉的な存在として機能してくれる国となり、日英同盟はそれを明確化する契機であった。

漱石は岳父の中根重一に宛てた書簡（一九〇二・三・一五付）で、日英同盟を「貧人が富家と縁組みを結びたる」関係に譬えてい

るように、国内では歓喜をもつて受け止められたこの同盟に冷ややかな眼を投げかけていた。この表現が寓意を用いていることと自体が、漱石的な着想の形を示している点で興味深いが、ロンドンで日々を送る漱石にとつては、両国の同盟関係が決して対等の地平で結ばれたものでないことを実感せざるをえなかつただろう。こうした漱石の意識を念頭に置けば、イギリス人の老婦人に自転車と苦闘させられる「自転車日記」の「余」は、同盟国としてアジアでロシアと戦わせられる〈日本〉に重ねられることになる。作品の冒頭でミス・リールは「偉大なる婆さん」と表現され、彼女との「会見の栄を肩身狭くも双肩に担へる余に向つて婆さんは媾和条約の第一款として命令的に左の如く申し渡した。／自転車にお乗んなさい」（／は行換え）という形で、「余」が否応なくこの難行に駆り出されることになつた事情が語られている。「偉大なる婆さん」という表現が、前年の一月に八一歳で逝去したヴィクトリア女王という「偉大なる婆さん」を想起させるだけでなく、彼女とのやり取りにも「会見」「媾和条約」といった国同士の交渉に用いられる用語が充てられている。それを踏まえれば、この「婆さん」にそのほかされて「余」が取り組むことになる「自転車」という統御の利きにくい乗り物は、西洋を模倣しつつ推し進められる〈帝国主義〉ないし〈軍国主義〉に相当し、それが傷や痛みを伴う苦闘をもたらすのは、太平洋戦争の敗戦に至る日本の帰趨を予言しているとも受け取られるのである。

『吾輩は猫である』の鼠に対する「吾輩」の奮闘が日本海海戦の戯画であつたように、漱石の作品における寓意は多くの場合戦いや侵略をはらむ国同士の関係を対象としている。明治

四〇年代に書かれる『それから』（一九〇九）や『門』（一九一〇）は、同時期に進行していった日韓併合に至る流れを映し取つており、晩年の『明暗』（一九一六）には直近の戦争である第一次世界大戦が人物同士の関係に投げかけられている。こうした手法は次第にリアリズムのなかに溶かし込まれて目立たなくなるものの、創作の起点としてほとんどの主要作品に見出される。小説の処女作である『吾輩は猫である』はその最初の例であつたが、ここで見たように「自転車日記」にはすでにその先蹤といふべき表現が刻印されているのである。

『吾輩は猫である』の寓意については、すでに指摘しているように、作品の冒頭で強調される〈猫—人間〉の位階性をももなう対比が〈日本人—西洋人〉の比喩をなしていた。進化論的な考え方が支配的であつた時代にあつて、西洋人が進化の頂点に置かれるのに対して、アジア人やアフリカ人は未だ進化の途上にある、〈人間〉になりきつていない生き物と見なされがちであつた。そうした差別的な眼差しを漱石もロンドンで受け取つていたが、それが自身を「猫」に見立て、人間世界を揶揄的に眺める視点の動因となつている。『猫』「一」章の「人間は利己主義から割り出した公平と云ふ観念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る様だ」といった、現実世界の支配力において優勢な存在をあえて下に置き、それによつて自身をも相対化する表現は、「自転車日記」にも含まれ、「余」が急に方向転換したために後続の男が「落車」した際に、それがやむをえない事態であるはずなのに「西洋人の論理は此程迄（これほどまで）発達して居らんと見えて、彼の落ちは多いに逆鱗の体で、チン／＼チャイナマンと余を罵つ

た」という記述がなされている。こうした表現の連携からも、猫に揶揄される「人間」が「西洋人」の比喩をはらむことが見えてくるのである。

3 日本での生活の再開

このように眺めると、明治三六年（一九〇三）一月にイギリスから帰国した時点で、漱石は小説を書くための技法をほぼ身につけており、それを生かす形で『吾輩は猫である』が生まれることになったということが出来る。いいかえれば、漱石をへ小説家にした契機はやはりイギリス留学の体験であり、それが「尤も不愉快の二年」（『文学論』「序」）であつたとしても、漱石に自己と外界の、あるいは日本と世界の関わりを再考させる場となり、そこで得たものから言葉を紡ぎ出していくことで、漱石の文学世界はもたらされることになった。しかし帰国から『猫』の誕生までには二年弱の時間があり、最初の小説に取り組む前に、漱石は帰国後学者、教師としての業務に心労を重ねねばならなかった。

漱石は帰国後延べ七年間在職した五高から一高へ転じ、念願の東京で教鞭を執ることになる。熊本から東京へ戻りたいというのは、ロンドン滞在中の早い時期からの希望であり、明治三四年（一九〇二）二月に狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎の四名に宛てて、ロンドンでの生活と勉学の状況を伝えた書簡（一九〇一・二・九付）の末尾に「僕はもう熊本へ帰るのは御免蒙りたい帰つたら第一で使つてくれないかね」という希望

を添えている。六月に藤代禎輔に宛てた書簡（一九〇一・六・一九付）でもそれを受けて「第一高等学校で僕を使つてくれないかと狩野へ手紙を出したが返事が来ない熊本はもう御免蒙りたい」と帰京の願望が洩らされている。また同年九月に出された寺田寅彦宛の書簡にも漱石は「僕も帰つて熊本へは行き度ない可成東京に居りたい然し東京に口があるかないか分らず其上熊本へは義理があるから頗る閉口さ」（一九〇一・九・一二付）と記し、熊本を去りたい意向を示している。

漱石が熊本から東京に戻りたいという欲求を強めていったのは、実質四年半にわたる熊本での教師生活が、転任の条件として時間的に十分であると思われたであろうことに加えて、ロンドンという〈世界の中心〉にやつて来て生活し、研究をおこなうという意識が、熊本を一層辺境の地として見えさせることになったからであろう。国費留学生として国の信を担いつつ異国での日々を送ることは、漱石を苦しめつつも、彼のなかの国家意識をあらためて喚起していたが、それは藤代に宛てた手紙の末尾に「近頃は英学者なんでもものになるのは馬鹿らしい様な感じがする何か人の為国の為に出来そうなものだとボンヤリ考へて居る」と記されていることからもうかがわれる。したがって一高への転任の希望は、「英学者」としてより本格的なキャリアを積みたいというよりも、国の趨勢をより身近に感じられる位置にいて、そこに何らかの形で参与したいという願望のいい換えにほかならないといえるだろう。

にもかかわらず、文部省が漱石に与えた課題は「英語研究」であり、さらに明治三四年秋頃から取り組み始めた研究は西洋と東洋の差違を踏まえつつ、思想・哲学と文学の基底的关系を

追求するという、国からの課題から乖離した方向を取ることに
なつたために、漱石は研究を進めれば進めるほど、自分を追い
込まざるをえない悪循環に陥つていつたのだった。そうした経
緯を踏まえれば、漱石が帰国後、当時一高の校長を務めていた
狩野亨吉の尽力によつて一高への転任を実現させ、東京での生
活を再開させてからも、その精神状態が好転していかなかった
ことは十分理解しうる。

東京に戻つた漱石は、一時妻子が留守宅として居住してい
た、岳父の中根重一郎の離れに身を寄せた後、本郷駒込千駄木
町に借家を見つけ、三月にそこに転居している。八畳の座敷と
六畳の部屋が四つあり、その玄関脇の一つを漱石が書齋として
いたこの家は、南に畑が広がり、西が郁文館という中学校に接
し、北側の家には二弦琴の師匠が住まうという環境で、『吾輩
は猫である』の苦沙弥先生宅のモデルとして登場している。漱
石の滞英中、妻の鏡子と二人の子供は、漱石の休職給与の二五
円のみでやりくりしていたが、そこからさらに「戦艦費」とい
う名目で戦争のための準備費として一割の二円五〇銭を差し
引かれるため、実際には二〇円余りの生活費にすぎず、ロンド
ンでの漱石に劣らぬ逼迫した暮らしをつづけてきていた。父の
屋敷内で暮らしているにもかかわらず、重一は貴族院書記官長
を辞職した後相場に手を出して失敗するなどして経済的な困
窮のなかにあつたために、実家からの援助も得られなかった。
漱石自身も生活費の他は書籍の購入に月一五〇円の留学費を
費やしていたために一切蓄えはなく、「無一文でかえつて来た」
(夏目鏡子『漱石の思ひ出』)状態であつた。そのため新居での世
帯道具を調達することもできず、友人の東京帝大教授大塚保治

に百円ほどの借金をしてようやく生活を開始することができ
たのだった。

漱石は念願の一高に移つたものの、五高を辞職して借金を返
済するための退職金三〇〇〇円を得ていたために、新規での採用
という形になり、それまでの教授から講師への降格人事となつ
た。給与も年額七〇〇円と、五高での一二〇〇円から減収と
なつたが、大塚保治や狩野亨吉の配慮により、同じく新任の
アーサー・ロイド、上田敏とともに帝国大学文科大学にも講
師として就任し、八〇〇円の年俸を得ることになつた。都合
一五〇〇円の年収となり、五高での水準を上回つたが、熊本と
東京の物価の差違や次々と生まれる子供の養育を考慮すれば、
決して余裕のある生活が許される収入ではなかつた。

漱石にとつて、講師への降格はともかく一高への転任自体は
希望に叶う人事であつたが、東京帝大への同時の奉職は必ずし
もその意に添うものではなかつただろう。ロンドンの下宿で
あえて「一切の文学書を行李の底に収めたり」(『文学論』「序」)
という状態で積み重ねられたノートは、文学論というよりも思
想論ないし文明論としての性格の方が強く、それを活用して文
科大学英文科の授業に充てることは困難に感じられたはずで
ある。それ以前にこの神経症に陥るほど精力を注いだ研究は、
国費留学生として国の要請に応じた内容ではなかつたのであ
り、そうした来歴をもつ漱石が〈帝国大学〉の教壇に立つこと
自体が重荷として受け取られたに違いない。加えて漱石の前任
者は小泉八雲すなわちラフカディオ・ハーンであり、すでに文
学者としての高名を得ていたハーンの後任を務めることが、二
重の意味で漱石に重圧を与えることになつた。

すでに日本に帰化していたハーンは、にもかかわらず日本人教師の二倍にもなる外国人教師としての給与を要求し、さらに外国人教師に与えられるべき一年間の研究休暇（サバティカル）を申請して、当時の文科大学長井上哲治郎に拒否されるなど、待遇面で文科大学との間で摩擦が生じ、明治三六年三月に辞職するに至っていた。ハーンはこの時点で『知られざる日本の面影』（二八九四）『東の国より』（一八九五）『心』（一八九六）『霊の日本にて』（一八九九）『日本雑録』（一九〇一）『骨董』（一九〇二）などの著作を英語で世に送っており、日清戦争後の日本に対する国際的な関心の高まりとともに、欧米でも知られる存在となっていた。そのためハーンの辞職の際には外国からも文科大学の処遇を難じる声が寄せられ、「国家的忘恩」という非難を与えるフランスの新聞もあつた。学生の間でも文学者としての名声と学生への親密な態度によつてハーンの人気は高く、彼を留任させようとする運動が起こされた。

ハーンは学者としての正規の経歴をもたず、来日前はもつぱらアメリカで新聞記者として健筆を振るうと同時に著述活動をおこなっていたが、文科大学の教室ではつねに教壇の椅子に座らずに立つたまま話し、歌うような澄んだ声で名調子の講義をおこなう教師であり、学生のなかには多くの信奉者がいた。また同僚とはほとんどつき合わないにもかかわらず学生との面会は厭わず、課題のエッセイの優秀者にはシェイクスピアやポーの全集を〈賞品〉として与えるといった工夫によつて、学生の心を巧みに掴んでいた⁸。

漱石は第一にこうした前任者の文学者としての名声と教師としての評判と闘わねばならなかった。漱石の学者としてのプ

ライドはハーンよりも高く、またそれに見合う経歴と実力の持ち主であつたために、学生には「接し難いやうな畏ろしいやうな印象」（金子健二『人間漱石』いちろ社、一九四八）を与えがちであつた上に、着任時には俳人でもあることは知られていなかったものの、ハーンほどの文学者としての名声をもたなかったために、必ずしも着任の当初から敬愛を集めたわけではなかった。

それに加えて漱石を圧迫していたのは、ロンドンで自分が苦闘の末に見出した研究者としての立場が、学生に訴えかけなかつたことである。漱石が当時の学制の三学期に当たる四月から始めた講義は「英文学形式論」であつたが、その目的は「吾々日本人が西洋文学を解釈するに当り、如何なる経路に抛り、如何なる根拠より進むが宜しいか、かくして吾々日本人は如何なる程度まで西洋文学を理解することが出来、如何なる程度がその理解の範囲外であるかを、一個の夏目とか云ふ者を西洋文学に付いて普通の習得ある日本人の代表者と決めて、例を英国の文学中に取り、吟味して見たい」（『英文学形式論』一九二四）⁹ということであり、まさに漱石がロンドンで取り組んだ、日本人としての感受性の基底に立つ個人として、西洋の文学をいかに評価しうるかという問題を打ち出していた。しかし英文学の作品を素材としながらも、文学の一般概念の定義から始まり、様々な文体の形式を分析的に論じていく講義は、テニソンやロッセティの詩の美しさを趣味的、情感的に歌い上げるように語るハーンの魔力的な講義とは対蹠的であり、拒否反応を示す学生も珍しくなかつた。後に劇作家となる小山内薫は授業から遠ざかり、歌人として活躍することになる川田順は、ハーンのない文科大学に愛想をつかして法科に転じていった。

こうした学生の反応が漱石を憂鬱にしたことは十分察せられる。さらに苦い皮肉であったのは、東京に帰ってきた漱石が、ロンドンで縁を切ったものの幻影に出会ってしまったことであろう。化学者池田菊苗との交わりを契機として、明治三四年の秋に「幽霊の様な文学をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやらう」（「時機が来てゐたんだ——処女作追懐談」一九〇八）という決意のもとに、それまで個人教授を受けていたクレイグから離れて、心理学や社会学の理論を取り入れた文学の基底的研究に独力で取り組んだ結果として、「英文学形式論」の講義もおこなわれていた。しかしクレイグと同じく詩の美しさを愛し、それを情感的に表現することをもつぱらとする前任者の影に漱石は圧迫されねばならなかったのである。

4 感情の「地」と「図」

幸いなことにハーンはあくまでも漱石の前任者であり、同僚として角をつき合わせる必要はなかったが、自分が帝国大学文科大学の教師として学生に受け容れられ難いという見通しは漱石に容易につけられた。鏡子の回想でも世界的な名声をもつ「小泉先生」と比べて「とうていりつぱな講義ができるわけのものでもない。また学生が満足してくれる道理もない。もつとも大学の講師になつて、英文学を講ずるといふことが前からわかつてゐたのなら、そのつもりで英国で勉強もし準備もしてくだらうのに、自分が研究してきたのはまるで違つたことだなどとぐずついでゐたやう」（『漱石の思ひ出』）だが、狩野亨吉

らの従憑によつて教壇に立つことを了解するに至つた。こうした漱石の懸念は、ロンドンでの研究が「英文学研究」から乖離したものであることを自覚していたことをはつきり物語つているが、おそらく漱石のなかでは、東京に転任することになつたとしても、高等学校の語学教師をつづけることになるであろうから、英文学に特化した研究は当面必要ないという見込みがあつたのであろう。

しかし天才気取りの文学青年も少なくない文科大学の教師として、学生に受容されないまままで過ごすことは当然漱石の自尊心が許さなかつた。六月の学年末試験でも学生の学力不足に失望させられた漱石は、文科大学講師を辞任する旨を大学側に申し出たが、当時大学長を務めていた坪井九馬三に慰留された。その結果九月からの新学期には、ロンドンで積み重ねた理論的研究を英文学に援用した、『文学論』としてまとめられることになる講義に着手するとともに、シェイクスピア『マクベス』を対象とした作品評釈の講義を開くことになつたが、後者の教室は満員の聴講生で埋め尽くされた¹⁰。その背景には、前年八月に欧州での巡業から帰国していた川上音二郎・貞奴一座のシェイクスピア劇が人気を博していた状況もあつた。それまでの壮士劇や泉鏡花の作品による新派劇から一転して『オセロ』や『ハムレット』といったシェイクスピア劇を上演し、歌舞伎の女形とは違って貞奴という欧州でも評判を得た〈女優〉が登場するという新鮮さもあつて、劇場の明治座や本郷座は連日の大入りとなつてゐた¹¹。『マクベス』の公演ではなかつたものの、劇場に足を運んだ学生たちは、漱石の講義を頭に浮かべつつシェイクスピア劇の生の舞台を見られることに幸運を

感じていた。

漱石の『マクベス』の講義は作品の構築や人物造形から、『文学論』にも多くの頁が割かれていた。比喩表現への評価など、多角的に作品を捉えるもので、とりわけ作品の修辭については「」の metaphor は巧いとか拙いとか、この書き方はいゝとか悪いとか、聴いて居ると実に歯切れがよくて面白い」（布施知足「漱石先生の沙翁講義振り」『英語青年』一九一六・六¹²）という、まさに漱石の「自己本位」を發揮したものであった。ロンドンで見出したとされるこの境地は、現地で積み重ねられた『文学論ノート』のなかには直接姿を現さず、むしろそこでの考察をとおして、作品への判断や解釈の基底をなす「趣味 (Taste)」が、それぞれが内在させている文化的文脈に支えられた「local」で「individual」なものであり、純粹に普遍的な解釈などありえないという確信に到達することになった。その点で「自己本位」は下宿に蟄居しておこなわれた研究の起点ではなく、その半ばで見出された方法的な境地にほかならない。『文学論ノート』の実践編はロンドンでは書かれず、帰国後の『マクベス』評釈の講義がその場になったともいえるだろう。やはり聴講生であった弟子の森田草平も漱石の「如何にも作家らしい、真の鑑賞的批評を下してゐられる」という感銘を覚え（『漱石先生と私』上、東西出版社、一九四七）、金子健二はシェイクスピアを「この狸ぢぢい」と近親者のように呼ばれる漱石の口調に驚いている（『人間漱石』）。

そこにはそれまで禁欲的であった漱石の英文学に対する「自己本位」が躍動していたが、その評釈のあまりの闊達さから、そのスタイルを揶揄する「六道の辻にて——シェイクスピア

より」と題された匿名の葉書を受け取ることもあった。いずれにしても、漱石の「自己本位」の発露の場として自他ともに受け取られた『マクベス』評釈の講義によって、帰国時からつづいていた漱石の神経症的な鬱屈はある程度晴らされたはずであった。ところが漱石の精神状態は決してそのような好転を示すことはなかった。

ロンドンでの最後の年である明治三五年（一九〇二）に深刻化した漱石の神経症は、帰国後も収まることはなく、東京に戻って間もない頃には、長女の筆子が火鉢の縁に五厘銭の硬貨を置いたのを見て、「いやな真似をする」と言つて彼女を打擲するといふ振舞いに及んだりした。それはロンドンで乞食に銅貨を恵んだところ、下宿の便所の窓に同じ物が置いてあり、それを自分を探偵している下宿の女主人の仕業だと思ひ込んだという記憶が喚起されたからであつたが、こうした症状が大学での当初の不評判と相まつて持続していった。何者かに追跡されていくといふ感覚のなかには、自分が国費留学生としての責務を全うしておらず、帰国後も〈帝国大学〉の教員にふさわしい仕事を十全に果たしていないという思いが強迫的に作動していたかもしれない。『漱石の思ひ出』によれば、「六月の梅雨期ごろからぐんぐん頭が悪くなつて、七月に入つてはますます悪くなる一方です。夜中に何が癩にさはるのか、むやみと癩癩をおこして、枕と言はず何といはず、手当たりしだいものをほうり出します。子供が泣いたといつては怒り出しますし、時には何が何やらさつぱりわけがわからないのに、自分一人怒り出しては当たり散らしております」といふ状態に陥つていった。

鏡子は当時妊娠しており、つわりが激しかったこともあって、漱石の癩癩から待避しつつ、またそれをこれ以上起こさせないために、七月には一時実家に帰っている。その後このまま離縁になることを心配した兄の直矩が、漱石に妻との仲の回復を進言し、さらに鏡子の母が漱石に詫びを入れる形で漱石を納得させ、九月に鏡子は千駄木の家に戻った。一〇月には三女の栄子が生まれ、新しい学期での講義が学生の間で好評を得ていたにもかかわらず、翌月から漱石の精神状態は再度悪化し、家族への振舞いが過酷になっていった。そのため中根家との間に離縁話が持ち上がるに至ったが、中根家の側が離縁を拒絶する姿勢を示したために、鏡子は漱石の元にとどまることになった。

こうした漱石の精神状態の根底にあるものとして、小宮豊隆は「鏡子の無理解と無反省と無神経」を挙げている。これは晩年の自伝的作品『道草』（一九一五）に描かれる、妻のヒステリーに苦しめられる主人公健三の苦悩から遡及的に導き出された面があるが、小宮によれば「想像力を持たず、神経も遅鈍で、反省することを知らない人間」が傍らにいたことが、漱石には耐え難かったのだという（『夏目漱石』）。もつともこれは鏡子個人の人間性に帰せられているのではなく、誰が妻であったとしても、漱石の繊細な神経と過剰な想像力を否定的に刺激せざるをえなかったという見方を小宮は示している。しかしもしそうであれば、漱石と鏡子との間にもつと直接的な衝突があったとも考えられる。妻への憤りから、子供や周囲の物に「当たり前散ら」すという『道草』には描かれていない振舞いは、それが鏡子へのあてつけであったとしたらいささか稚拙に映らざるを

えない。

また江藤淳はやはり鏡子との関係の悪化を重視しつつ、その原因が当時つわりと軽度の肋膜炎に悩まされていた鏡子が「単に家事ができないだけでなく、妊娠ということを別にしても夫の性的欲求に応じられぬ状態にあった」ことが、漱石から家庭の慰安を奪い、悲惨な状況に追いやっていったという解釈を提示している（『漱石とその時代』第二部、新潮社、一九七〇）。この把握においてはむしろ小宮よりも強く、漱石の癩癩の所以が鏡子の個人的な事情に帰せられているが、その一方で江藤は「彼が報復しようとしていたのは彼を圧迫する世界の悪意に対してであり、彼自身の生と苦痛の無意味さに対してであった。彼を叫ばせていたのが、その心底にひそむ「異様の熱塊」であったことは疑えない。彼は曠野にひとり立って、突風に吹きさらされ、暗黒の宇宙に向かって怒号していた」という抽象的な表現で漱石のやり場のない憤りを捉えようとしている。

鏡子との関係は軽視できないものの、漱石の抑圧と鬱屈の原因をそこに収斂させることは、その精神を矮小化することにもなるだろう。漱石の癩癩の暴発は、明らかに鏡子を目的としたものではなく、むしろその具体的な対象がそこにないからこそ起こった騒擾の有様であったと見なされる。その点で江藤淳が「彼が報復しようとしていたのは彼を圧迫する世界の悪意に対してであり、また「異様の熱塊」を抱えて「暗黒の宇宙に向かって怒号していた」と語っているのは、抽象的な言葉遣いながら、むしろ漱石のなかに渦巻き、彼を抑圧していた行き場のない熱情を適切に表現しているだろう。漱石に創作や表現の契機を与えるものは、出発時から晩年に至るまで一貫して外部世界との

関わりであったが、未だ作家という表現者となっていないなかった二〇代から三〇代にかけて神経を病むことが多かったのは、そこで与えられる不透明な感情がはげ口を与えられずに内部でわだかまつてしまいがちだったからである。作家となつて以降の漱石は、心身を削つてなされる創作が強いる胃潰瘍という肉体的な病に苦しめられることが多くなり、神経衰弱そのものからは相対的に解放されている。

帰国後の漱石を神経症に追いやっていた原因は一義化しえないものの、大学での当初の不評判や鏡子の家庭での振舞いに加えて、念頭に置くべきなのは日露戦争へと傾斜していく日本の状況である。そこにはいわゆる感情の「地」と「凶」の関係が成り立っていることが推察される。すなわち帰国した明治三六年初頭から翌明治三七年にかけては、日本とロシアが緊張関係を強め、戦争が避け難い事態へと突き進んでいった時期に相当している。漱石の内面にこの状況が入り込まないはずはなく、その不安定な危うさが漱石の感情や気分の「地」を形作り、そこに折り重なるように妻や大学の問題が「凶」的な濃淡を与えていたと考えられる。この構図は誰においても存在するが、強い国家意識をもつ漱石においてはこの「地」が強い濃度をもつて、その感情的な基底を形成しているのである。

それは「凶」としての神経症的な症状が、その折々に漱石が置かれていた境遇と必ずしも合致しないことから察せられる。明治三六年前半の症状が、帰国後の環境の激変と文科大学での当初の不評判によつているとすれば、それが改善される九月以降に症状も快方に向かつても良かったはずだが、現実にはそうなつておらず、逆に鏡子との関係自体は彼女が三女の栄子

を出産して以降好転したわけではないにもかかわらず、鏡子の表現によれば「いい按排に翌三十七年の四、五月ごろからだいぶよくなつて参りました、だんだんこんなむちゃなことをしないやうになりました」（『漱石の思ひ出』）という変化を示している。こうした照応を見ると、折々の境遇が漱石の気分を左右している以上に、彼の内面を貫流している「地」的な気分がその態度や振舞いに影響していることがうかがわれる。そしてそれを形成している動因は、やはり主体を取り囲む、日露戦争への傾斜を核とする日本社会の動向と、それがもたらしている時代の空気であつたと考えられるのである。

5 開戦による気分の変容

漱石の神経症が好転した「三十七年の四、五月ごろ」と、それ以前の間に起こつたものとは、とりもなおさず日露戦争の開戦にほかならない。日露戦争は明治三七年（一九〇四）二月八日におこなわれた、旅順港に停泊していたロシア海軍の旅順艦隊に対する日本海軍の駆逐艦による奇襲攻撃によつて口火を切っている。同日に日本陸軍の木越旅団が朝鮮の仁川に上陸し、翌日には木越師団を護衛した海軍の瓜生戦隊が仁川港外でロシアの巡洋艦と砲艦を攻撃して自沈に至らせ、翌一〇日に日本政府による正式の宣戦布告がなされている。その後海軍が二、三、五月の三次にわたる旅順口閉塞作戦を敢行する一方で、四月末には陸軍の第一軍が朝鮮半島に上陸し、四月三〇日から五月一日にかけての鴨緑江岸での戦いでロシア軍を破り、つづ

いて第二軍が五月二六日に遼東半島の隘路にある南山のロシア軍陣地を攻略した。第二軍も四千人の死傷者を出したが一応の勝利を収め、さらに大連を占領した後北上して、遼東半島先端に位置する要所である旅順を援護するべく南下してきたロシア軍を、六月一四日に得利寺の戦いで破っている。

日露戦争の開戦は漱石に強い刺激を与え、新体詩の「従軍行」「征露の歌」を作らせている。『帝国文学』明治三十七年五月号に掲載されたこれらの詩は、当時多く作られた日露開戦をモチーフとする新体詩の一角をなすもので、ロシアの敵兵をどこまでも追跡し、殲滅するまで戦うという内容が歌われている。たとえば「従軍行」の「天子の命ぞ、吾讐撃つは、臣子の分ぞ、遠く赴く。／百里を行けど、敢て帰らず、千里二千里、勝つことを期す。／祭たる七斗は、御空のあなた、傲る吾讐、北方にあり。」(二)、あるいは「見よ兵等、われの心は、猛き心ぞ、蹄を薙ぎて。／聞けや殿原、これの命は、棄てぬ命ぞ、弾丸を潜りて。／天上天下、敵あらばあれ、敵ある方に、向ふ武士。」(六)といった決まり文句を連ねた表現は凡庸といわざるをえないが、書簡で『太陽』明治三十七年六月号に載った大塚楠緒子の「進撃の歌」と比較して「女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の従軍行などはうまいものだ」(野村伝四宛、一九〇四・六・三付)と述べるように、漱石自身はこの詩を自賛している。

漱石の審美的な判断力に照らせば到底肯定されなれないと思われるこの詩を気に入っているということは、この作品が彼の〈表現者〉としての意識からではなく、〈生活者〉としての感情から生み出されていることを物語っている。いいかえればそれ

は漱石の〈日本人〉としての気分の異様な昂揚の現れであり、それが日露戦争への突入によつてもたらされているのである。漱石を間近で見っていた小宮豊隆は、「三国干渉」以来「十年の無理非道に耐えて来た日本が、決然としてロシアに対して起つた時、その勇氣と情熱を、自分自身の上に深切に感じて、共に起つほどの興奮を覚えたに違ひない」(『夏目漱石』)と述べている。

おそらくそこには、ロンドン在任時に否定的な形で喚起された国家意識を反転させる契機としてロシアとの戦争を捉える意識が作動しているだろう。事実翌年の談話「批評家の立場」(二九〇五)では漱石は「僕は軍人がえらいと思ふ。目的は露国と喧嘩でもしやうといふのだ、日本の特色を拡張する為め、日本の特色を發揮する為めにこの利器を買つたのだ」と語り、同じ年の談話「戦後文界の趨勢」(一九〇五)でも「兎に角日本は今日に於ては連戦連捷―平和克復後に於ても千古空前の大戦勝国の名誉を荷ひ得る事は争ふべからずだ、こゝに於てか啻に力の上の戦争に勝つたばかりでなく、日本国民の精神上にも大なる影響が生じ得るであらう」と冒頭で語り、この戦争をきつかけとして、日本人がこれまでの盲目的な西洋追従の軛から解き放たれてその独自性を發揮する方向に歩み出すであろうという観測を示している。こうした日露戦争への漱石の評価はそれ以降も保たれ、大正二年(一九一三)の講演「模倣と独立」でも「日露戦争はオリヂナルである、軍人はあれでインデペンデントなることを証拠立てた」とした上で、日本の文学者もそれに倣うべきことが主張されている。

もちろん漱石は決して戦争讚美者であるわけではなく、一方

では戦争の残酷さをモチーフとし、語り手が旅順で戦死した知人の恋人を追跡する内容をもつ『趣味の遺伝』（二九〇六）なども同時期に書かれている。おそらく漱石の対外的な戦争に対する感情は完全にアンビヴァレント（両価的）であり、日本人としての矜持を満たしうる機会として肯定されると同時に、国家のために個人の尊厳がないがしろにされる場として呪詛される対象にほかならなかった。しかし日露戦争の開戦時には、その相手が「欧州第一流の頑固で強いといふ露西亜である」（「戦後文界の趨勢」）こともあつて、それと互角以上の戦いを展開している状況は、漱石の気分を昂揚させずにおかなかった。

逆にいえば、それまでの時代の空気が漱石を鬱屈させ、癩癩の爆発に導くような抑圧的な要素をはらんでいたということでもある。そして現実には日露戦争前夜に当たる明治三六年は、そうした焦燥感を国民に抱かせる状況として進んでいった。とくに日本人を苛立たせていたのは、義和団事変（北清事変）の際にロシアが満州に送り込んだ軍隊を、事変の収束以降も撤兵させなかつたことである。義和団事変が導きとなって明治三五年（一九〇二）一月末に締結された日英同盟にともなう「満州還附協約」によつて、ロシアは満州から三期に分けて撤兵をおこない、満州を清に返還することになっていたが、ロシアは第一次撤兵を実行した以降は満州に事実上居座つてしまい、完成されたシベリア鉄道によつてかえつて増兵を図る姿勢を示した。漱石よりも一層国士的な気質をもつ二葉亭四迷は東京外国語学校教授の職を辞して赴いていた北京から坪内逍遙に宛てた書簡（一九〇三・六・一三付）で、次のような文面で憤懣を露

わにしている。

近着の新聞でみると議会は相変らず妥協騒ぎで撤兵問題などはねツから気乗の様子見えす何の為の妥協沙汰と呆れもすれは憤慨もされ申候　こんな事では到底駄目二候　もう位取りて露国に数歩を譲りあるものといふもの二候　政府も駄目なら国民も駄目、支那に続いて亡びるものは必ず日本なりと、情の激する時にはタイナマイトでもぶツけてやりたいやうに成り候へ

こうした感情を次第に国民の多くが共有するようになる。明治三六年には日露戦争への推進者となつた東京帝大の戸水寛人、寺尾亨らいわゆる「七博士」が対ロシアの強硬論を唱え始め、国民のなかでもロシアの撤兵を強く求め、さもなくば開戦を辞さないという空気が高まることになった。第二次撤兵の期限は明治三六年四月であつたが、これを過ぎてもロシアが撤兵の気配を見せないことは国民の憤懣を高め、『東京朝日新聞』明治三六年八月一〇日の記事によれば八月には東京で「対外硬同志大会」が開かれ、会場には五百人を超える聴衆が詰めかけてロシアの振舞いを糾弾する声を上げた。当日不参加であつた大隈重信は書面で「国民の決心は恰も將に破裂せんとする火山の如し、政府はかゝる後援を有しながら、何ぞ躊躇するの甚だしきや」という、「意気極めて激越」な意見を寄せていた。『読売新聞』八月二三日の論説では、いずれロシアの南下の地となる朝鮮への出兵が主張され、「我輩は我政府が速に優柔不断の陋態を脱し、巧遅よりも寧ろ拙速に出ん事を切望す」という一文で論説が締めくくられていた。

こうした、協約を守らないロシアの態度に業を煮やして「破裂せんとする火山」のような状態に置かれた国民が、ロシアに対してだけでなく開戦と非戦の間で「躊躇」や「優柔不断」をつづけている日本政府に焦燥を募らせていくという構図が、明治三六年の夏頃に強まっていった。そして漱石自身がまさにその空気を体現していたのであり、その時期に「火山」のような憤激を家族に撒き散らしていたのである。

一方同じ時期に内村鑑三や幸徳秋水らによる非戦論が主張されていたが、明治三六年の秋から彼らが拠つていた新聞である『万朝報』が開戦論に方向転換することで彼らは同紙を去り、世論はほとんど開戦論一色に染められるに至る。そして翌年二月の奇襲を皮切りとする開戦に突入することになるが、児島襄の『日露戦争』（第一巻、文藝春秋、一九九〇）で「国民の大部にとつて、開戦は、いかなれば「待ちかねた」心境でむかえられた」と述べられるように、勝敗以前にそれはこれまで長引かされた国民の焦燥や苛立ちを沈静させる出来事であった。さらに仁川沖や旅順口沖における海戦の勝報が祝賀の空気をもたらし、各地で提灯行列がおこなわれたりした。そうした昂揚感のなかで漱石の気分も次第に好転していき、「従軍行」が作られたりもしている。『吾輩は猫である』が書かれたのはその連続線上においてであった。

6 解消される〈無名性〉

周知のように、この作品ははじめ子規を継いで『ホトトギス』

を営んでいた高浜虚子の勧めによつて書かれ、彼や河東碧梧桐、阪本四方太らが催す「山会」で朗読され好評を博したものであった。明治三七年（一九〇四）の夏頃に虚子は「連句」や「俳体詩」の創作に漱石を誘い、漱石は進んでそれに参加している。連句も俳体詩も形式的には中世の連歌と同じで、それを俳味を重んじつつおこなうものであり、たとえば「尼」と題された俳体詩の最初の連は「女郎花おみなえし女は尼になりにけり（虚子）」「弦の切れたる琴に音も無く（漱石）」「天蓋につゞれ錦の帯裁ちて（虚子）」「歌に読みたる砧もぞ打つ（漱石）」といった形で展開されている。こうした試みに加えて、虚子の仲間の間で盛んにおこなわれた文章会が、文章に「山」すなわち焦点がなくてはならないという子規の主張を実践しようとする「山会」で、一二月の会に何か書いてみないかと虚子が誘ったところ、当日漱石は「愉快さうな顔をして私を迎へて、一つ出来たからすぐここで読んで見てくれ」（高浜虚子『漱石氏と私』アルス、一九一八）とかなり分量のある原稿を虚子に差し出したのだった¹³。

漱石が添削を求めたために、虚子はとどころに見られた冗漫な箇所を削り、その上で山会で朗読したところ、「兎に角変つてゐる」（『漱石氏と私』）という評判を得、『ホトトギス』の翌年一月発刊の号に掲載された。当初表題がついていなかったが、「猫伝」と「吾輩は猫である」の二つを漱石に提案され、虚子を選んだ後者が作品名となった。好評は山会同人の間にとどまらず一般読者にも広がり、この号の『ホトトギス』は大きく売り上げを伸ばした。『新潮』明治三八年二月号にはすでに、同時に『帝国文学』に発表された『倫敦塔』（一九〇五）と併せて「夏目漱石の文、平俗の裡、無量の趣味を蔵せり。赤門派

の文の厚化粧して、いやな目遣ひする醜女のそれに比して、此は瀟洒、たゞ天真」と、美文調をもつぱらとする大町桂月、高山樗牛らの「赤門派」と対比しつつ漱石の表現を肯定する評が出されている¹⁴。こうした好評にうながされて、一回限りの予定であった『吾輩は猫である』は翌明治三十九年八月の号まで『ホトトギス』で連載が重ねられ、無名の俳人であった一高と帝国大学の講師は、またたく間に人気作家に変じていった。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い」という一行から書き始められる『吾輩は猫である』の語り手である「吾輩」には、未だ〈無名〉の作者である表現者としての自己と、国際的に未だ十分認知されていない〈無名〉の近代国家である日本が巧みに折り重ねられている。福澤諭吉の「一身独立して一国独立す」(『学問のすゝめ』一八七二―七六)というスローガンに象徴されるように、個人と国家を連続させて捉えるのは明治人に共通する着想であったが、漱石はそれを創作の源泉としつづけた作家で、ほとんど作品にその連続性が見られる。その嚆矢となったのが、第一節で取り上げた「自転車日記」であり、ここでは下宿の「偉大なる婆さん」に自転車と苦闘させられることになった自分と、日英同盟によってアジアの憲兵的存在としてロシアと戦わせられることになった日本が重ね合わされていた。『猫』はその寓意がより明瞭な形で打ち出されており、進化論的な価値観から西洋人を進化の頂点として見る当時の眼差しを下敷きにしつつ、西洋人が「驚キモセネバ知りモセヌナリ」(「日記」一九〇一・一・二五)という対象でしかない日本と、一高と帝大の教壇に立つものの、書き手としては無名の俳人ではない自分分が、「人間」以下の存在としての名もない「猫」に込められ

ていた。

興味深いのは作品の連載中にこの〈無名性〉が自身と日本の両方の次元において解消されていくことである。すなわち漱石は『猫』と『倫敦塔』『幻影の盾』『琴のそら音』『薔露行』(いずれも一九〇五)といった同時期に並行して書かれた浪漫的な短編小説群を発表することで一躍作家としての名声を得、また日本は戦前は圧倒的不利が予想されたロシアとの戦争で、犠牲を払いながらも互角以上の戦いを進めていったことで、世界は日本への評価を改めていった。開戦後三ヶ月目の一九〇四年五月一日の『タイムズ』紙には早くも、西洋諸国が「驕慢な「黄色い小人」がロシアの巨人の無敵の力の前にあえて挑むわけがないと声高に一笑に付していた事実自体が、その政治的判断の浅はかさ、ないし厚顔無恥の証明と見てさしつかえない」と評価する記事が掲載されている¹⁵。

『吾輩は猫である』の好評は山会の朗読会以降次々と漱石の耳に入り、その創作家としての自信を強めていった。書簡でも寺田寅彦に宛てて「然し僕の猫伝もうまいなあ。天下の一品だ」(一九〇五・二・一三付)と自賛し、同じく漱石門下でドイツ文学者となる皆川正禧には「君が大々的賛辞を得て猫も急に鼻息が荒くなつた様に見受候。続篇もかき度杯と申居候」(一九〇五・二・一三付)と意欲を示している。この記述は「続篇」として書かれた「二」章冒頭の「吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜられるゝのは難有い」という一文と照応し、「猫」が表現者としての漱石の自己の寓意であったことが確認される。

しかし世評の高まりとともに漱石自身が〈無名〉から〈有名〉

な存在に転じていくことで、作中の語り手としての「吾輩」の立場や眼差しも変化せざるをえない。すなわち「一」章で「人間」に対比される卑小さによつて提示されていた「吾輩」の名もな「猫」としての輪郭は、日露戦争の戦局が優位になるとともに、漱石自身もその〈無名性〉を脱することによつて変容し、両面から「人間」の域に近づいていくことになる。明治三十八年三月の『ホトトギス』に掲載された『猫』「三」章の冒頭部分は、その事情をよく物語っている。

三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸い人間に知己が出来たので左程退屈とも思はぬ。先達ては主人の許へ吾輩の写真を送つて呉れと手紙で依頼した男がある。此の間は岡山の名産吉備団子を態々吾輩の名宛で届けてくれた人がある。段々人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来た様な心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しやう杯と云ふ量見は昨今の所毛頭ない。(三)

ここでは猫の仲間である「三毛子」や「黒」の消息に触れつつ、自分がむしろ人間世界の一員に組み込まれるようになったかのような感覚が語られている。「人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる」という一文が、作家としてもはや無名の域を脱したという漱石の内心の表現であることはいうまでもない。それと歩調を合わせるというほど順調ではなかったものの、日本は『猫』が世に現れた明治三十八年一月一日に、堅固な要塞が築かれていた旅順を多大な兵

力の犠牲を払った末に陥落させ、二月には奉天の会戦でロシア軍を後退させ、三月一〇日に奉天を占領するに至っている。さらに五月二七日から二九日にわたる日本海海戦では、日本の連合艦隊はロシアのバルチック艦隊を壊滅させ、世界中を驚愕させた。この大敗によつて日本海の征海権を事実上失つたロシアは、講和に向けた動きを取り始めることになる。

こうした自身と日本がともに獲得するに至つた評価の高まりは、「一」章における、人間に不当に支配され、従属的な位置に置かれた猫という語り手の輪郭を希薄にすることになる。「一」章においては、「吾輩」は「人間と同居して彼等を観察すればする程彼等は我儘なものだと断言せざるを得ない」という感慨を表白している。人間の「我儘」さゆえ「我等が見付けた御馳走は必ず彼等の為に掠奪せらるゝ」のであり、仲間の「白君」は「人間と戦つてこれを剿滅せねばならない」という義憤を訴え、「吾輩」もそれに共感するのだった。猫が見付けた「御馳走」を「彼等の為に掠奪せらるゝ」という事態が、日清戦争後の「三国干渉」と、そこで日本が召し上げられた遼東半島にその後ロシア自身が進出して地歩を築いてしまった流れを指すことは容易に推せられる。日本人に「臥薪嘗胆」を強いた三国干渉は日露戦争の起点ともなったが、「いくら人間だつて、さういつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう」と語られる、「猫」すなわち日本人と自身が広く認知、評価される状況への待望は、意外に早く叶えられることになった。

とくに無名の表現者としての自己を表象していた「猫」は、いち早く「人間」の域に昇格し、「一」や「二」で登場してい

た仲間の猫たちとは異質な次元の住人となったために、これらの仲間たちは「三」以後姿を見せなくなる。こうした「吾輩」の立場やそれにもなう意識や眼差しの変化が、作品の叙述にも影響を与えている。すなわち叙述の文体が「写生」の色合いを強めることになるのである。

7 〈小説家〉の誕生

『吾輩は猫である』は写生の理念を重視していた子規を引き継いで営まれていた『ホトトギス』に発表された作品であり、その影響下にもたらされている。この作品を写生文の実践として捉える見方もあるが、少なくとも山会で高浜虚子によって朗読された最初の章は写生文としては書かれていない。もともと子規とその流れを汲む人びとの間で写生の理念は一律ではなく、個々の理解でそれを把握しつつ俳句や散文において実践している。子規自身は写生文を「世の中に現れ来りたる事物（天然界にても人間界にても）を写して面白き文章を作る法なり」（「叙事文」一九〇〇）と規定しており、この描かれる「事物」の〈面白さ〉が文章の「山」として見なされている。総じて子規は表現の「山」を自身の意識や想像によってもたらすのではなく、焦点となる面白さをはらんだ対象を描くことによつて「山」が生まれると考えており、絵画に關しても「写生に精神を加へるといふのは大作には必要であるが、普通の画は写生したばかりで多少の精神が加はるものである」（「写生、写実」一九〇一）と述べている。

この写生が面白みをもつのは本来なんらかの興趣を含んだ対象を描くからだという考え方は虚子にもあるが、虚子はむしろそうした選択をおこなう作者の想像力の作動に重きを置いている。たとえば写生趣味の俳句が面白く感じられるのは、「目前に在る数限り無き事実のうちより特に是等の事実を探り出す事は作者の脳中に醸し成された空想趣味の働きではあるまいか」（「俳話」一九〇五）と語っている。本来写生と「山」は相互に逆行する面をもつ觀念であるだけに、表現の面白さの所以が、描かれる対象にあるのか、描いている主体の意識作用にあるのかには、作者の創作観によつて比重の差違が生じることになる。

漱石の写生観は「写生文」（一九〇七）と題された論評に披瀝されているが、漱石は子規とは逆に対象を描く作者の「心的状態」を重視する立場を打ち出している。この「心的状態」は「人生観」ともいえるもので、それを通して対象を見ることによつて「人事に關する文章の差違」がもたらされる。写生文においては客観的であることが尊ばれるが、その描写において「写実文家は自己の精神を幾分か割いて人事を視る」姿勢を取る。ここでは描写の主体と対象の間には「一致する所と同時に離れて居る局部」があり、決して「写さるゝ彼になり切つて、彼を写す訳には行かぬ」とされる。こうした共感と距離を共存させた写生文家の態度は「大人が小供を視るの態度」になぞらえられる。子供が泣いても大人と一緒に泣きはしないように、写生文家も「泣かずして他の泣くを叙する」のである。

この外界の「人事」を描く客観性が重んじられながら、作者の「心的状態」に色付けされる形でそれが現れるという考え方

は、漱石の作品群を貫流する基本的な理念であり、『猫』においてもそれが明らかに認められる。〈猫の眼差し〉は人間世界をその外側から眺める特異な「心的状態」であり、そうした偏向を与えられた視点によって飼い主の家庭を主とする人間世界の様相が描出されていく。しかし対象に対して「一致する所と同時に離れて居る局部」を共在させつつ、余裕をもつて外部世界の様相を描き出すという漱石的写生文の姿勢は、「一」章ではまだ十分成就されていない。「吾輩」は泣いているところを書生に拾われたと思うとあらためて笹原に棄てられ、そこから苦沙弥の家に潜り込んでその住人となったのだが、周囲の人間たちは自分にとつて脅威以外ではなく、また知り合いになった猫の仲間たちのなかにも車屋の黒のように乱暴な輩がいて、脅しをかけられたりする。山会で朗読されたこの章では、「吾輩」の眼差しはむしろ周囲の下方に置かれており、「大人が小供を視る」のとは逆の方向性のなかで外界が観察されている。

しかし漱石の作家としての認知の獲得にもなつて、猫の仲間たちが姿を消していくのに応じて、「吾輩」の眼差しの位置は次第に高みに上がつていき、傍観者的な知識人のそれとして作動するようになる。それによつて叙述は人間世界の様相を皮肉と諷刺を交えて描き出すことを眼目とすることになる。たとえば「七」章で海水浴の効用を語るくだりでは、「吾輩」はそれをとつくに心得ており「これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云ふ足の二本足りない野呂間に極つてゐる。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の効能を吹聴したり、海水浴の利益を蝶々して大発明の様

に考へるのである」と、人間を猫の下方に置く評価を下している。また同じ章で「吾輩」は銭湯の洗い場で裸になつた人間たちの姿を覗き見て、「何が奇観だつて吾輩はこれを口にするを憚る程の奇観だ」という感慨を覚え、文明人の要件である衣服を脱ぎ捨てて野蠻の境地に返ろうする姿に驚愕しつつも、そこにも厳然とした個人間の差別が存在することを認識している。こうした眼差しの変容を経て「十」章で語られる、食卓の上を飯や芋が行き交う騒動のなかで苦沙弥の子供たちが朝食をとる場面では、まさに「大人が小供を視るの態度」による叙述が成就している。一番下の「坊ば」がみそ汁を満たした飯に突っ込んだ箸をはね上げて顔を飯粒だらけにしてしまうのにつづいて、次のような叙述がおこなわれている。

坊ばが一大活躍を試みて箸を^はおね上げた時は、丁度とん子が飯をよそひ了^{おわ}つた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔の如何にも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御ぜん粒だらけよ」と云ひながら、早速坊ばの顔の掃除にとりかゝる。(中略) 姉は丹念に一粒づゝ取つては食ひ、取つては食ひ、とう／＼妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまつた。此の時只今迄は大人しく沢庵をかちつて居たすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくづれたのをしゃくひ出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であらうが、汁にした薩摩芋の熱したの程口中に答へる者はない。大人ですら注意しないと火傷をした様な心持がする。ましてすん子の如き、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽する訳である。すん子はワツと云ひながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その

二三片がどう云ふ拍子か、坊ばの前まですべつて来て、丁度いゝ加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしやく食つて仕舞つた。(十)

ここで「諸君も御承知であらうが、汁にした薩摩芋の熱したの程口中に答える者はない。大人ですら注意しないと火傷をした様な心持がする」という補足を加える主体は、明らかに「人間」の一員として同輩である読者「諸君」に向けて語つており、子供たちの食事の様相は「猫」という外部世界からの眼差しによつてというよりも、距離を取りつつ余裕をもつて対象を眺める「大人」の視点によつて綴られている。この朝食の場面や、その後やつて来た姪の雪江が苦沙弥の細君や子供たちを相手に会話をする場面の描写は生気に富んでおり、漱石がその写生的方法を確立して「小説家」としての技量を発揮していることが分かる。

けれども「吾輩」の眼差しが「写生」の主体として確立されてくるといふことは、彼が「語り手」として抽象化されるといふことでもあり、次第に「猫の眼」という視点としての意味を希薄にしていかにざるをえない。またそれと照らし合うように浮上してくる後半における変化は、主人の苦沙弥が次第に雄弁を振るうようになることである。もともと中学の英語教師としての苦沙弥は、漱石が厭っている教師という職業にある自己の戯画化であった。もちろん漱石自身は勤勉で優秀な教師であり、教室ではいい加減な説明で生徒をねじ伏せ、英語の原書を開いても数分で眠りに落ちてしまう苦沙弥とは対極をなしている。

しかし文学者としての無名性を反映させる形で戯画化されていた苦沙弥の姿は、作者が知名度を高めるのに応じて、少しずつその思念を披瀝する主体に変じていき、終盤では漱石自身の言説とも重ねられる人生観や世界観を口にするようになる。

「九」章では苦沙弥がおこなう、人間社会が狂人の集合体かもしれない、理屈や分別をもつた人間は逆に迫害されて「瘋癲院に幽閉され」る羽目に陥るのではないかという考察を「吾輩」は逐一描出し、それができる理由として「吾輩はこれで読心術を心得て居る」という説明をしている。これは両者の相互の分身関係を明確にするとともに、猫としての「吾輩」が姿を消すことを予示する伏線ともなっている。登場者の「心」を読める存在とは要するに物語の「語り手」にほかならず、「吾輩」の機能がそこに収斂されていくのであれば、彼が「猫」である必要はなくなっていくからである。そして終章の「十一」章では「吾輩」は苦沙弥の家に集う、美学者の迷亭、物理学者の寒月、哲学者の独仙といった人びとの会話をひたすら写すことに終始し、前半部分ではもっぱら聞き手であった苦沙弥もここでは、「当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になつて居る」や「神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりも甚だしき苦痛である」といった、漱石の講演やエッセイでの発言を想起させるような意見を雄弁に述べたりしている。

長々とつづく議論は、いづれも文明の進展が人間を個人化すると同時にその孤立や孤独を深めて、生よりも死へと誘惑されがちな社会をもたらしつという線で展開していき、漱石の文明批判を同心円的に誇張した趣きを漂わせている。そこには写生の基底となる作者漱石の「心的状態」が垣間見られるが、この時

点においてはすでに〈猫の眼〉を介在させることなく、自身の内面を通して現実世界を把握、描出しようとする漱石の姿勢が浮かび上がっている。苦沙弥たちの議論が終わった後に、「吾輩」がビールを飲んで酔っぱらい、瓶の水に落ちて死ぬことで作品は閉じられる。この「吾輩」の死はそれまでの叙述の変容のなかで十分に準備されており、彼の〈語り手〉としての退場によつて、〈小説家〉としての漱石が本格的に誕生することになるのである。

注

- 1 漱石はこの年イギリス留学のために七月中旬に熊本に住居を引き払って上京し、七月二三日と八月二六日に根岸の子規庵を訪れている。その間の八月一三日に子規は、明治二八年（一八九五）の五月の清からの帰国時以来の大量吐血をして、衰弱を強めていた。
- 2 このスコットランドの地名の発音は、出口保夫『ロンドンの夏目漱石』（河出書房新社、一九八二）によれば、正しくは「ピトロッホリー」ということだが、ここでは『永日小品』における漱石の記載に従っている。
- 3 清水一嘉『自転車に乗る漱石 百年前のロンドン』（朝日選書、二〇〇一）による。
- 4 小宮豊隆『夏目漱石』（岩波書店、一九五三）による。同書によれば、犬塚は「偶然漱石と下宿を同じくしてゐたので、漱石の神経衰弱を気の毒に思ひ、自転車に積古にひっぱり出した」のであったようだ。
- 5 I・カント『判断力批判』（篠田英雄訳、岩波文庫、一九六四、原著は

一七九〇）。カントはここで「笑いは緊張した期待が突然無に転化するところから生じる情緒である」と規定している。

- 6 漱石は英文学のなかでも『ガリヴァー旅行記』の作者であるスウィフトを評価しており、『吾輩は猫である』もその影響下に書かれているように、本来寓意文学への好みをもっている。『文学評論』（一九〇九）では「諷諭」という用語によつてスウィフトの作品を対象として寓意の論理を追求しているが、ここでは「諷諭の興味」に二種類あり、「一は地の文自身が文学的で面白いこと、一は地の文の裏面に潜む本意と表面にあらはれた意味との間に並行を見出すことの面白みである」という的確な説明を与えている。漱石自身の作品がこの二種類の「興味」によつて成り立っているといえるだろう。

- 7 日本海海戦がおこなわれたのは明治三八年五月二七日から二八日にかけてであり、『猫』『五』章が掲載された『ホトトギス』が刊行されたのは同年の七月一日である。したがつて漱石はこの海戦がおこなわれた直後にそれを話題として作品に取り込んでいることになり、時局にたいする鋭敏な反応を見ることがができる。

- 8 ハーンに関する記述は主に田部隆次『小泉八雲』（北星堂書店、一九八〇）によつた。

- 9 漱石の講義「英文学形式論」は死後の大正一三年（一九二四）九月に「夏目漱石述」「皆川正禧編」として岩波書店より刊行されている。皆川の「はしがき」には、漱石が帝国大学に着任した当時の事情も記されているが、「大学を逐はれた」ハーンに代わつて教壇に立つことになった講師夏目金之助を「好感を以て迎へた学生は決して多数ではなく、頼杖をついて講義を聞く者や居眠りをする者さえあったという。こうした状況が漱石の憂鬱を深めたであろうことは十分察せられる。

10 金子健二『人間漱石』(前出)に含まれる日記(一九〇三・一〇・六)には、「マクベス」の人氣はたいしたものだ。一般講義で一躍して文科大学第一の人氣者になられた夏目先生は『英文学概説』に於ても次第に人氣を得られるやうになった」と記されており、『文学論』の内容を講じる講義によっても學生を惹きつけるようになったことがうかがわれる。

11 川上音二郎・貞奴一座が欧州巡業から帰国したのは明治三十五年(一九〇二)八月で、初め舞台に立つことを躊躇した貞奴が説得されてデズモーン役を引き受け、凱旋公演の「オセロ」の幕が明治座で開いたのは翌明治三十六年(一九〇三)二月一日の紀元節の日であった。劇場は初日から大入りとなり、とくに女優という存在を初めて眼にすることになった日本の観客は貞奴の美貌と演技に魅了された。その後一座は「ハムレット」「ヴェニス商人」などのシェイクスピア劇を連続して公演し、大成功を収めた。(井上精三『川上音二郎の生涯』)

12 引用は『漱石全集』別巻(岩波書店、一九九六)による。

13 「吾輩は猫である」が生まれる具体的ななきつかけとなったのは、明治三十七年(一九〇四)の初夏に夏目家に入り込んだ一匹の黒猫であった。夏目鏡子の「漱石の思ひ出」によれば、何度つまみ出しても家に戻ってきてしまうこの猫に鏡子が困っていたところ、漱石は「そんなに入って来るんならおいてやつたらいいぢやないか」と進言し、夏目家で飼われることになった。この猫を自身に見立てつつ、漱石の最初の小説作品が生み出されることになったのだった。

14 虚子自身も「ホトトギス」明治三十八年二月で「文飾無きが如くにして而も句々洗練を経、平々の叙写に似て而も蘊藉する処深淵、這般の諷刺文は我文壇独り著者を俟て之あるものといふべし」と、淡々とした叙述のなかに深い諷刺を込めた作品として賞賛している。また虚子の「漱石氏と私」(前出)では、「吾輩は猫である」を書き始めることで漱石の気分

は眼に見えて好転し、「猫を書きはじめて後の漱石氏の書齋は俄かに明る
い光がさし込んで来たやうな感じがした。漱石氏はいつも愉快な顔をし
て私を迎へた」と語られている。

15 こうした日本への評価は同時に、日本を西洋諸国にとって危険な国と見
なす「黄禍論」を生み出すことにもなった。「タイムズ」の同じ記事にも、
「日本がこの戦争に勝つようなことがあつたら人類に何やら災いが起こ
る」という声は西洋諸国民の間に起こっていることが記されている。日
露戦争後は一層この黄禍論が高まり、アメリカなどで日系人の排斥がお
こなわれることになった。